

飯島賢二の『恐縮ですが...一言コラム』

第 391 回 新たな社会貢献のあり方への模索

2010.11.14

「**道徳を忘れた経済は罪悪であり、経済を忘れた道徳は寝言である**」とは、二宮尊徳の言葉だ。道徳とは、政治、経済、社会の全てにおける真理であり、教養の最たるものと思っている。

例えばロータリー・クラブ、そもそも世界的な社会奉仕団体といわれている。「社会奉仕」というのは、ロータリアンが、自分の地域社会で、生活の質を向上させるために行う活動に関係するものだ。青少年や高齢者や障害者、その他の人々で、より良い生活への希望を求め源として、ロータリーに期待を寄せている人々への援助も含むという概念であろう。

その精神的支柱は「**超我の奉仕**」と言う考え方である。世界中のロータリアンは、地元地域に還元するために一世紀余りにわたり「超我の奉仕」を行ってきた。それぞれのロータリー・クラブが異なるように、社会奉仕のあり方には、色々あっていい。が、要は社会の人々のニーズに応えようとするものでなければ、自己満足で終わってしまう。

最近、社会貢献に対する関心は、個々の企業においても、総体的に高まっているようである。そんな取組みを「**ソーシャルビジネス**」(Social Business)といい、その企業を「**社会的企業**」(Social Enterprise)と呼んだりしている。

以前から、企業はただ単に利益を追求するだけでなく、組織活動が社会へ与える影響に責任をもち、あらゆるステークホルダー(利害関係者:消費者、投資家等、及び社会全体)からの要求に対して適切な意思決定をするため、その余裕の範囲内で社会貢献を果たす...**CSR**(Corporate Social Responsibility)と言う考え方があった。

しかし、ソーシャルビジネスは少し違うようである。たとえば...。ユニクロを展開する**ファーストリテイリング**がグラミン銀行と合弁会社を設立し、バングラデシュ国内において新たにソーシャルビジネスに取り組むことを発表したのは記憶に新しいところだ。合弁会社を設立し、衣料品の販売等を通じて同国の貧困問題等を解決しようとするものである。

ソーシャルビジネスはいろいろな定義があるが、経産省が2008年4月にまとめた「**ソーシャルビジネス研究会報告書**」では「環境や貧困問題などさまざまな社会的課題に向き合い、ビジネスを通じて解決していこうとする活動の総称」という捉え方がなされている。これまで、地域や社会における課題は、行政などの公的機関によって対応が図られていたが、それらの課題すべてを公的機関が解決することは難しくなっている。ソーシャルビジネスは、社会的課題の解決をボランティアとして取り組むのではなく、あくまでもビジネスという事業性を確保した形で行うことに特徴があると思う。

新時代における社会的課題を、ビジネスとして解決しようとするソーシャルビジネスは、日本でも注目され、新たなビジネスモデルとして事業を展開していくことが期待されている。